学校事例 2

さまざまな場面にあふれる学び合いを柱に授業をつくる

東京都 大田区立久原（くがはら）小学校

学校生活のあらゆる場面に子どもが育つきっかけがあるという信念の下、教育課程の研究を進める大田区立久原小学校。教育活動の柱と位置付けているのが、学び合いの充実だ。全ての学年・教科で、子どもが自ら考える工夫を凝らし、学び合いを生み出している。

学び合いのある授業で考えを深める子どもを育みたい

大田区立久原小学校は、閑静な住宅街に位置し、教育に関心の高い保護者が多い環境にある。２００５年度からは、研究主題「確かな学力・豊かな心をはぐくむ教育課程の編成」の下、学校生活全体を通して子どもを育てる教育課程の研究に取り組んできた。教育活動の土台には、「学校生活のあらゆる場面で子どもは育つ」という考え方がある。中休みを30分とするなど「遊び」も重視するが、柱とするのは最も多くの時間を占める授業だ。清水一豊校長は次のように語る。

「授業づくりでは、問題解決的な学習と学び合いを重視しています。主体的に学び自ら追究する子どもや、自分とは異なる考えがあることを知り、自己を客観視したり、友だちの良さに気付いたりできる子どもを育みたいからです。そうした学びは人間関係も築いていきます。授業と学級経営は別物ではなく、授業を通じて学級経営をする、授業は教科のねらいを達成するだけでなく、まさに子どもの『生きる力』を育むものだと捉えています」

全体的に学力は高く、穏やかな子どもが多いが、物事に主体的に取り組んだり、友だちの考えを聞いて自分の考えを深めたりすることには消極的な面がある。そうした子どもに学習の楽しさを伝え、思考力を付けながら主体性を引き出すためにも学び合いは欠かせないと、研究主任の木下健太郎先生は話す。

「通塾率が高いためか、知識が先行している子どもが多くいます。しかし、知識の背景にあることを考えたり、課題を解決したりする力は、必ずしも十分ではありません。一方的に教師が知識を伝えるのではなく、学び合いのある授業によって、友だちと共に考えることや、課題を解決することの楽しさを感じてほしいと思っています」

学び合いは、課題の内容や提示の仕方を工夫し、全学年で取り入れている。飯島典子副校長は次のように話す。

School Data

◎1893（明治26）年開校。「学びのターミナル」をコンセプトに、地域や保護者と共に子どもを育てる仕組みづくりに力を注ぐ。2011～13年度は、東京都教育委員会「言語能力向上推進校」の指定校。

校長	清水一豊先生
児童数	710人
学級数	22学級
所在地	〒146-0085 東京都大田区久が原4-12-10
TEL	03-3753-9411
URL	http://academic2.plala.or.jp/kghre/
公開研究会	久原フェスタ（学習発表会）2012年2月18日（土）

思考が深まる「学び合い」――「そうか、なるほど！」のある授業づくり

「例えば、1年生なら自作のなぞなぞを出し合うなど、楽しく伝え合う学び合いを行っています。6年生になると討論会の学習を行います。討論会を通して自分の考えを伝える難しさを学びます。このように、発達段階に合わせて徐々に学び合いのレベルを高めることが必要です。それらの土台として、子ども一人ひとりの意見を認めることを、どの学年でも大切にしています」

学び合いを深めるための考え方の型や話型は、発達段階に応じて指導している（**写真1**）。

写真1　6年生の教室に掲示してある「考えるための12の道具」。発達段階に合わせた指導で、考えを広げたり整理したりしやすくして学び合いを深めている

ポイントを絞った指導で学び合いの時間を捻出

学び合いのある授業を構成するに当たり、教師が第一に心掛けるのは、考える価値のある学習課題を提示することだ。

「子どもの『知りたい』『考えたい』という気持ちを、どれだけ高められるかを大切にしています。例えば、社会科では飛鳥・奈良時代にどのように日本の国がつくられていったのかを単元を通じて皆で追究していく課題とし、1時間ごとに大化の改新などについて考えを深めることで、課題に迫っていく流れを意識しています」（木下先生）

「社会科などでは、例えば古墳が作られた理由など、考えても答えが想像の域を出ない問題もあります。『ここでの目的は答えを出すことではなく、関心をもたせ考えを深めることとする』など、教師が考えさせる目的を意識して、課題を設定することも大切です」（清水校長）

授業は基本的に教科書に沿って進める。指導すべき内容が整理されていて、学年で進度や内容をそろえるのに適しているからだ。しかし、教科によっては教科書の内容を全て授業で取り上げようとすると時間が足りなくなり、学び合いの時間が確保しにくくなる。そこで、木下先生は次のように工夫する。

「例えば、社会科は教科書にある知識が多く、全てを教えようとすると考える時間を十分に確保しにくい教科です。しかし、学習内容を基にした学び合いを少しでも行うと、授業がより楽しくなり、思考も深まります。そこで、知識として押さえる内容は教科書を読むことなどで効率的に押さえます。また、学習指導要領でポイントを確認し、教科書にある資料でも取り上げないこともあります。こうして、『ここは考えさせたい』というポイントで学び合いの時間をしっかり取るようにしています」

授業の工夫

考えさせる多様な工夫が学び合いを活性化させる

学び合いの活性化のために木下先生が心掛けているポイントは、次のように整理できる。

◎学び合いの基礎情報を学級全体で共有する

例えば、社会科では、同じ資料から5個の情報を読み取れる子どももいれば、10個の子どももいる。資料から言えることから考える

大田区立久原小学校校長
清水一豊 Shimizu Kazutoyo
「美点凝視。常に子どもや先生の良さを見付ける。校長として、子どもが子どもらしく過ごせる場を保障したい」

大田区立久原小学校副校長
飯島典子 Iijima Noriko
「全ては子どものために、という気持ちで取り組む。副校長として、学校と地域・保護者をつなぎたい」

大田区立久原小学校
木下健太郎 Kinoshita Kentaro
研究主任、6学年担任。「学び合いを重視した授業で、子ども同士、子どもと教師のより良い人間関係を築きたい」

学び合いをする場合、そのままでは同レベルで意見を交わすことが難しい。そこで、最初に情報を発表し合い、同じ量の知識や情報をもたせることで、全員が学び合いに参加できるようにする。

◎考える視点を提示する

話し合いに必要な視点を適切に与えないと、グループ活動は学び合いに発展せず、形だけで終わりやすいと、清水校長は話す。

「ノートに書いた内容を互いに読み上げるという活動だけでは情報交換に終わり、学び合いとは言えません。考えを出し合った上で、『共通点や相違点を整理してみよう』『異なる考えが出た要因を考えよう』などと、話し合いの視点を与えることによって考えの交流が始まり、学び合いが生まれます」

◎書く場面を多く設定する

書くことは思考の一形態と考え、発見したことや考えたこと、授業の振り返りなどを子どもが書く機会を多く設ける。考えが整理されて、話し合いが深まりやすくなることに加え、教師が後で一人ひとりの思考の流れを確認でき、評価の資料ともなる。

書く前には、「気付いた事実を書く」「作者と自分の考えを比べる」「自由に感想を述べる」などポイントを明確に伝える。そのためには、教師は書かせる目的を明確にしておくことが必要だ。

書いたものは添削する。子どもは「書いたことは先生が読んでくれる」という意識をもち、書くことへの意欲が高まる。良く書けているノートはコピーして配布したり、資料などを貼らせたりすることで、ノートは大切なものだという意識も育む。

◎全ての子どもの学びを保障する

学びへの主体性や積極性を引き出すために、一人ひとりの学びを保障し、授業への参加を実感させることを大切にする。例えば、木下先生の授業では、ノートに自分の考えを書くだけでなく、友だちのノートを読み、そこに感想を書く活動を行う。ペアで意見を交換する活動も多く取り入れる。授業中に学級の全員が発表するのは時間的に難しいが、これらの活動により、全員が自分の考えを発信し、友だちから意見をもらう機会を得られる。

◎反対意見を歓迎する

友だちの発言に対して賛成・反対を意思決定させることで、学び合いに発展させやすくなる。この時、できるだけ反対意見を出すように促すことがポイントだ。

「学び合いは同調だけでなく、反対の考えが出ることで活性化します。反対意見を出しやすくするためには、どのような考えも受け入れる学級であることが不可欠です。反対意見が出たら、『勇気を出して違う意見を言ってくれたね』『今の発言で皆の考えが深まったよ』などと褒めて、異なる考えを言いやすい雰囲気にしています」（木下先生）

授業外にも広がる取り組み・・・

日常生活のさまざまな場面で学び合いを推進する

授業外でも、学校全体として学び合いを支えるさまざまな工夫を凝らしている。

◎「久原スタンダード」による指導の標準化

同校は、「学習」「授業づくり」「清掃」「給食」などの分野で、全学年共通の「久原スタンダード」という基本ルールを定めている。その中には学び合いを支えるルールも多くある。例えば、「授業中の発言は、挙手して指名されてから」「指名された児童は起立し、聞き手の方を見て話す。聞き手は話し手に注目して聞く」「ノートには、（教科や学年に応じて）自分の考えや学習感想などを書く」などだ。

教師が座席を決めるのもルールの一つ。話し合いをリードする子どもが近くに固まらないようにするなど、授業の展開をイメージしながら決めている。同校では毎年、学級編成を行うため、このような基本ルールを決め、指導をスムーズに行えるようにしている。

◎「子どもが子どもを育てる」工夫

異学年で遊ぶ「あおぞら活動」や「交流給食」を実施。上級生はリーダーシップや優しさを身に付け、下級生は上級生の姿をモデルとして育っていく。子ども同士のかかわり合いから、学び、育つことが日常となっている。

◎地域や保護者と共に学ぶ、日常を大切にする

思考が深まる「学び合い」――「そうか、なるほど！」のある授業づくり

同校の教育の特色をよく表しているコンセプトの一つが「学びのターミナル」だ。

「学校は子どもや保護者、地域の人々がかかわり、共に育つ地域に根ざした教育活動が行われているターミナル（連結点）のような場所でありたいと考えています」（清水校長）

象徴的な活動は、夏休みに教師や保護者、地域住民が講師となって行う「夏休みドキドキ学校」。スポーツや工作、語学、地域探索など100講座を超え、子どもは自由に選んで受講する。また、年1回、「総合的な学習の時間」や生活科を核にした学習成果を発表する「久原フェスタ」にも、保護者や地域住民が多く訪れる。子どもやスタッフ、参観者同士が「皆で学び合える」場となっている。

他にも、朝礼では、校長が子どもにインタビューをしたり、担任も含め学級全体で遊ぶ「ぽかぽかタイム」を設けたりするなど、日常的にかかわり合う時間を大切にしている。

学校全体の仕組みづくり

若手を意識した多様な研修で目指す授業像を共有

同校では、20代の教師が教師全体の半数以上を占める。若手の指導力向上のため、校内研修にも力を入れている。通常の授業研究会の他に、同校が初任校という教師のために月1回の「若手研修会」を行う。この会には、ベテラン教師も参加しアドバイスをする。

「若い先生方は、どのような授業を目指すべきかを具体的に思い描けずに悩むことがよくあります。『学び合いは大切』と頭で理解していても、そもそも良い学び合いがどのような状態かが分からないのです。そこで、ベテラン教師が、授業を見せて目指す授業像をイメージしやすくしています」（木下先生）

「学び合える、一人ひとりが生かされている授業では、子どもが輝いています。そのような授業を若手の先生にも知ってほしいと思います」（飯島副校長）

学校全体の授業研究では、経験年数別のグループワークを取り入れ、若手教師からも積極的な意見が出るように工夫している。また、指導案の書式には「事前評価項目」を盛り込み、指導案の作成のポイントを明示すると共に、教師が自己評価する仕組みを導入（図）。これは、学期に1回、校長と副校長が全教師の授業を参観し、面談を行う際の資料となる。

「先生方自身の授業への思いも大切にしながら、先生方の個性をいかに良い方向に伸ばすかという視点でアドバイスをしています。これからも目指す授業像に向けて、学校全体で授業づくりをしていきたいと思います」（飯島副校長）

図　指導案の自己評価

4　今日分かったことや考えたことのキーワードを考え、文章でノートにまとめる。（5分）【個人】

事前評価項目（◎、○、△をつけてください。）	評価
・担当する一人一人の子をイメージして、指導案（略案）を作成した。	◎
・教材や資料の準備や工夫をした。	○
・板書計画をしっかりとたてた。	○
・子どもの興味・関心をひきつける導入を考えた。	○
・わかりやすい発問や指示を考えた。	○
・考える時間や表現する時間を設定した。	◎
・子ども達どうしがかかわる場面を設定した。	○
・学習形態が45分間ずっと同じにならないように1時間の流れを考えた。	○
・本時の評価の仕方を考えた。	○

◎　アピールポイント
子どもが調べる様子
ペアでの話し合い活動
子どもの発言内容

指導案に事前評価項目を設けることで、授業づくりのポイントをより強く意識できる。「考える時間や表現する時間を設定した」など学び合いに関連する項目が多い
＊同校の指導案より一部抜粋

清水校長が重視する 校長としての役割

一人ひとりの子どもに「自分には力がある」という自信をもってほしい。そのために、子ども時代を、子どもらしく伸び伸びと過ごせる学校を保障することが、公立小学校の校長としての私の務めと考えています。

学校経営の中心は授業づくりです。私も先生方と一緒に取り組むために、授業中に校内を回り、子どもたちの表情をよく見ることを心掛けています。その際、担任とは違う目線で子どもを見取り、子どもに直接、声を掛けたり、先生方にアドバイスをしたりするようにしています。

社会と国語の授業に見る学び合いの流れとポイント

実際の授業の中で、学び合いはどのような工夫と共に実践されているのか。
木下先生の授業を通して、子どもたちが伸び伸びと意見を交わし合い、個人や集団の考えを深めていくプロセスを追った。

T：教師　C：子ども、子どもの名前は仮名

6年生　社会「大陸に学んだ国づくり」（5／6時間目）

◉本時のねらい　貴族中心の文化について理解する

◇授業の流れ

❶前時の学習の振り返り

大仏が完成した頃の日本とアジアの国々の交流について学んだ前時の学習感想・キーワードを発表し合う。「鑑真」「鑑真の決意」「鑑真、苦難の航海」などが挙がった。

❷学習問題の提示

木下先生が、藤原道長の画像を見せ、「これは誰でしょう？」と問い掛ける。これまで天皇中心の国づくりが進んできたが、次第に藤原道長のような貴族が力をもつようになったことを簡潔に説明。

ねらい　「大陸に学んだ国づくり」という単元全体のねらいを思い出させながら、本時の学習を位置付ける

❸知識の確認・共有

藤原道長について教科書を音読した後、木下先生が貴族とはどんな人たちかを問い掛ける。教科書の絵（寝殿造の屋敷で貴族が暮らす様子）を見て貴族の暮らしについて分かったことを、各自が箇条書きでできるだけ多くノートに書く。約10分間。

続いて、隣同士で情報交換、全体発表で情報を共有する。

T　「隣の人と話し合って、いいなと思ったら自分のノートに付け加えていいです」

ねらい　隣の友だちと分かったことを比べ合い、個々の視点を広げる

全体発表では、「蹴鞠をしている」「大きな家に住んでいた」「烏帽子みたいなものを被っていて、靴を履いている。普通の人は裸足だけど」などが出された。他の子どもの発表につなげる発言もあった。木下先生は「いいですね」「同じところに気付いた人はいますか」「よく気付きました」などと、発言を価値付けた。

T　「もっと言いたいことがあったかもしれませんが、それはノートを集めた時に見せてもらいたいと思います」

ねらい　一人ひとりのノートを必ず見ていることを伝え、書く意欲を育む

この時代について確認するため教科書を読んだ後、この時代の文化にはどのようなものがあったか、教科書や資料集で各自が調べて、全体で発表する。発表では、「七夕」「お月見」「かな文字」「宴」「大和絵」「七草粥」「束帯と十二単」などが出された。

■教師の工夫・振り返り

授業の前半は、教科書や資料を読み取って歴史的事実を確認する学習が主体だった。木下先生は、子どもの発表時にはどの資料にあった情報かを必ず併せて述べるように伝える。資料から情報を読み取る力の育成のためだ。

「子どもによって資料から読み取れる情報の数にはばらつきがあります。それをペアや全体で確認し共有することで、皆が十分な情報をもって、その後の学び合いに生かせるように時間を掛けました」（木下先生）

授業だけで知識を定着させるのが難しい場合には、「歴史キーワードブック」や年表にまとめる作業などを宿題に出すことで知識の定着を補完している。

❹1人で考える

T　「文化がたくさん出てきました。実はこの頃の文化をまとめて言うと、平安文化と言います。では、この平安文化を短い言葉で言い換えると、特徴からどんな文化と言えるでしょう。○○な文化とした時に、○○に入る言葉を考えてみてください。答えは一つではないよ」

写真２　全体で共有した事実を基に、まずは個人で考える。机間指導で個々の理解度や考えの多様性を見取る木下先生

❺全体での学び合い

T　「では、考え終わった人、起立。鉛筆を持って、友だちのノートを見に行って、その友だちの意見に対して感想を書いてください。どうぞ」

C　（書き終えた子どもから他の子どものノートを見に行き感想を書き込む　写真３、4）

ねらい　感想を書き合うことで、子どもたちの考えを交流させる

T　「いくつか書いてもいいですよ」

T　「（数分後）席に戻ってください。では、発表してもらいたいと思います。どんな文化かな、そう考えた理由も言ってください」（以下、挙手した子どもから指名）

徳　田　「貴族の文化です」

T　「その理由は？」

徳　田　「その理由は、かな文字とか大和絵とかを考えたのは貴族だからです」

▶▶▶P.23 左上へ

思考が深まる「学び合い」――「そうか、なるほど！」のある授業づくり

T　「貴族が考えたことだから貴族の文化だそうです。同じ意見の人、いますね。なるほど。他にどうですか」

横　川　「日本独自の文化にしました（「いいと思います」という反応）。その理由は、日本にしかない文化が多かったからです」

T　「日本にしかない文化があった。日本独自の文化。どうですか。横川さんと同じ考えの人？（５人くらいが挙手）。ああ～、結構いますね」

大　泉　「ほぼ同じなんですけど、国風の文化だと思います。理由は、横川さんと同じなんですけど日本独自の文化だからです」

T　「どうですか？ 国風の文化。これ、日本独自のという意味ですね。山下くんはどうですか。発表してください」

山　下　「風流な文化です」

T　「風流な文化。どうですか？」

C複数　「いいと思います」

T　「どうしてですか？ どういうところが風流な文化でしょう？」

写真３　教室を歩き回って友だちのノートを読み、感想を書き込む

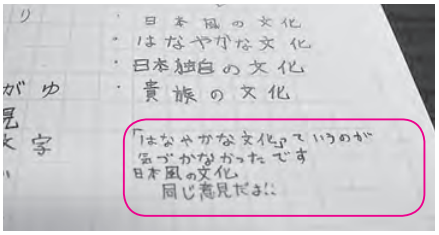

写真４　２人の友だちの感想が書かれている社会のノート

山　下　「日本的な文化」

T　「日本的な文化が風流だと思ったということですね。どうですか。賛成？ 風流だなという気持ちって分かりますかね。お、最後にどうしても言いたい？ 岩田くん」

岩　田　「優雅な文化だと思います。蹴鞠とか、和歌とか作ったりするから、おしゃれだと思いました」

T　「なるほど。いろいろ考えられましたね。答えは一つではないですよね。最後、難しかったかもしれないけれど、よく考えられましたね」

❻振り返り

木下先生は、子どもがよく考え、たくさんの考えが出たことを褒めた。学習感想とキーワードを書いたノートを集めて終了。

■教師の工夫・振り返り

木下先生はこの時代の文化を自分の言葉で捉え直し、学級全体で考えを深めるために「○○な文化」を考えることにした。学び合いの一環として、友だちのノートを読んで感想を書く活動を取り入れた。年度初めは、ノートの見方に偏りがある子どももおり、「男子は女子のノートを３人以上見るように」などと伝えていたが、どの子も経験を重ねるうちに、仲の良し悪しや男女の区別なく、空いている席に率先して向かうようになった。

「子どもたちは、自分の考えに友だちから感想をもらえるうれしさを知っています。授業後『書くのが遅くて、誰にも感想を書いてもらえなかった』と私に言った子のつぶやきを耳にして、『ぼくが書くよ』とその場で書いてくれた子がいました。この活動を通して人間関係も育まれていると感じます」（木下先生）

「○○な文化」の発表の時、木下先生は山下くんを指名して「風流な文化」と発表させた。机間指導の際に、他の子どもとは異なる視点の表現だと感じていたからだ。この日は時間が足りず、十分な意見交流ができなかったため、次時に「○○な文化」を再び取り上げて話し合う活動を組み込む構想を練った。

６年生　社会「大陸に学んだ国づくり」（６／６時間目）

◉本時のねらい　紫式部と清少納言についての理解を通じ、この時代の文化についての理解を深める

◇授業の流れ

❶前時の学習の振り返り

前時の学習感想・キーワードを発表し合う。「貴族。理由は貴族の世の中になったから」「貴族の文化。その理由は貴族が考えた文化が生まれたから」などが挙がった。

❷学習問題の提示

電子黒板で紫式部の画像を提示し、今日学ぶことを確認する。

❸知識の確認・共有

教科書や資料集で紫式部と清少納言を調べ、全体発表で情報を共有。木下先生が大きく分けて、全体的なこと、紫式部に関係すること、清少納言に関係することの三つに分かれることを伝えた。紫式部と清少納言に関して調べられたことの発表後、教科書を読み、この時代にかな文字が生み出され、日本独自の文化が生まれたことを確認する。

❹１人で考える

本時の知識も踏まえ、前時に考えた「○○な文化」について再考する。

T　「この間、平安文化はどういう文化か、○○な文化というのを考えてもらい、いくつか出てきましたよね。覚えていますか。風流な文化、貴族の文化、日本独自の文化、国風文化……。その他に○○な文化って考えられますか。昨日と今日のことと合わせてみて、どういう文化か、考えてノートに書いてみましょう」

▶▶▶P.24 左上へ

ねらい 平安文化についての考えを深めた上で、前時の学習を思い出させて発展させる

❺全体での学び合い

隣同士・全体で話し合う。各自がノートに考えを書いた後、挙手して発表し合う。木下先生は意見を価値付けながら板書する。

T 「新しいものを考えられた人、ぜひ言ってみてください」
森 「昨日、書いていたんですけど、はなやかな文化です。女の人が何枚も服を着ていたり、文化をいろいろ見て、はなやかなんじゃないかと思いました」
勝 又 「全体的に、平和な文化だと思います」
T 「全体的に、これはいい言葉ですね」
勝 又 「争いとかも、書いていないだけかもしれないけどなかったみたいなので。皆、和歌を書いたり蹴鞠をして遊んでいる人もいたので、平和で楽しそうだからです」
T 「いいね、書いてありましたよね。まだあります？ 岩田くん」
岩 田 「国文学の文化です」
T 「その理由は？」
岩 田 「それは枕草子とか源氏物語とかが書かれるようになって、急激にかな文字とかが広まったと思うからです」
T 「なるほど、国文学の文化。さあたくさん出てきました。平安文化って、こういう文化だよと。ちょっと考えてみましょう。この中で、あなたが一番ふさわしいと思うものはどれですか。それをノートに書きましょう」
C （それぞれの考えをノートに書く）
T 「書いた人は理由を考えてください。あと、山下くん、風流な文化について付け足しがありますね。『風流についてよく分かりません』って山下くんのノートに感想を書いている人がいたんだよね。どういうこと？」
山 下 「（辞書で調べたことを説明）自然を愛し味わう心。歌、絵、生け花などの上品な遊びです」
T 「それを風流という。なるほど。では聞きたいと思います。風流な文化が一番ふさわしいと思う人？（１人が挙手）。貴族の文化の人（１人）。国風文化の人（７人）。日本独自の文化の人（14人）。はなやかな文化の人（２人）、平和な文化の人（４人）、国文学の文化の人（２人）。ちょっと分かれました。では、なぜそういう意見にしたか、隣の人と自分の考えを説明し合ってください」

ねらい 自分の意見を決め、理由を説明し合う学習で更に考えを深める

T 「では、ちょっと意見を言ってみてください」
河 合 「私は日本独自の文化にしました。理由は、日本独自という言葉が、外国にはない、日本だけの文化というところがいいと思ったからです」
T 「どうですか、賛成の人？（半数以上が挙手）。付け足しは？」
岸 井 「河合さんに付け足しなんですけど。日本独自の文化がある前は漢字だけで大陸の文化だったので、それからは日本だけの文化を築いていたので、日本独自の文化がいいと思います」
T 「だそうです、どうでしょうか。では、森さん」
森 「私は国風文化にしました。その理由は、最初は大陸から伝わってきたからです。資料集を読むとひらがなは女の人が使うことが多かったみたいだけど、漢字をまだ使っている人も多かったと思うから、日本だけじゃなくて大陸からの文化もあるので、全てをまとめて日本という国だから国風文化だと思います」
T 「どうですか？ 大陸から伝わってきた文化も入っているから国風文化がいいんじゃないかと。賛成の人（あまりいない）、反対の人（あまりいない）、では悩んでいる人（半数以上）。悩んでいる。では山下くん、反対だったら言ってください。あなたの意見も含めて」
山 下 「ぼくは風流な文化にしました。風流的な文化だから」
C 「なんか理由になっていない」
T 「もう少し詳しく言えるといいね。せっかく意味を調べたんだから、その理由を言えるといいですね。他はどうですか。平和な文化、勝又さんが言ってくれた意見に賛成な人、誰か理由を言えませんか。付け加えで。では勝又さん、言ってみてください」
勝 又 「船に乗ったり、和歌を書いたり、蹴鞠をして、みんな楽しそうに暮らしているから、たぶん平和だったんじゃないかと思います」

❻振り返り

T 「いろいろな意見が出ましたね。最後、キーワードと学習感想のところに、考えが変わった人はその考えを書いてみましょう」

■教師の工夫・振り返り

１人で考える時間を設けた後、ペア学習で考えを比較して深めさせた上でいくつかの案に集約。賛成・反対を出させることで、平安文化についての考えを深めやすくした。

前時、山下くんのノートには友だちから「風流の意味が分からない」という感想が書かれていたため、木下先生は辞書で調べたことを発表させて学び合いのきっかけの一つとした。

「『分からない』ときちんと伝えた子どもがいたことで、風流の意味を皆で考える学習に広がりました」（木下先生）

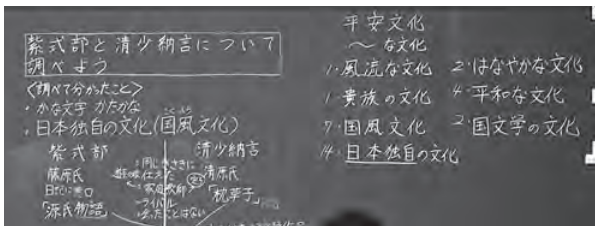

写真５ 本時の板書。それぞれの文化の横には挙手した子どもの人数が書かれている

写真６ 賛成・反対の挙手をさせながら進める

思考が深まる「学び合い」――「そうか、なるほど！」のある授業づくり

6年生　国語「生き物はつながりの中に」（7／7時間目）

◉本時のねらい　筆者の考えを読んで、自分の考えをまとめる

◇授業の流れ

❶1人で考える

教科書の本文を読み、筆者の考えが一番表れている部分を確認した上で、筆者の考えに対する自分の考えをノートに書く。

T　「5行ぐらい書いている人がいますね。自分の考えですから、迷わず思ったことを書いてください」

❷全体での学び合い

T　「いつも通り、友だちのノートを見せてもらい、そこに感想を書いてもらいたいと思います。終わった人は筆記用具を持って後ろに並びましょう。目安として3人以上、友だちの感想に対する自分の考えを書きましょう」

友だちのノートを読み、そこに自分の感想を書き込む。ひと通り書き終わった頃、席に戻り、友だちの感想の中で良いと思ったものを推薦し合う。推薦された子どもは自分の考えを発表。一同、推薦されたことを讃えながら聞き合う。木下先生は一人ずつ良い点をコメントし、学級全体で共有する（下記では省略）。

森　「勝又さんの感想がいいと思いました」

勝　又　「私のような人間だって、ずっと前の先祖は猿という動物になり、その前はとても小さな生物だった。どんな生き物でも時代をさかのぼっていけば同じ生き物になると思う。今は姿や形が全く違った生き物でも大昔はみんな同じだったので、動物や人類の無駄な殺し合いをすると、味方を殺していることになる。だから、そんなことはやめてみんな平等に平和に生きていけたらいいなと思いました」

下　山　「大泉さんの感想がいいと思いました」

大　泉　「筆者はロボットの犬と本物の犬を比べて、特徴や変化を書いて、最後に生き物と人間についてまとめて、『今生きていることは素晴らしい』と書いたり、『あなたはたった一つのかけがえのない存在です』など、人間などに呼びかけ、人間を励ましてくれているように感じ、自分も生き物も生きているということが改めて感じられました」

他にも数人が推薦され、発表した。

T　「友だちからの感想が書いてあると思いますので、それはしっかり見てもらいたいと思います。では、もっともっと発表してもらいたいのですが、先生ももう1回読ませてもらいたいので、ノートを出してください。よく考えて、たくさん書いていました。次回からまた違う勉強をしていきましょう」

■教師の工夫・振り返り

「3人以上の友だちのノートに感想を書くように」と伝えたが、8人の感想が書かれた子どももいた。

「友だちが自分の考えを読んで、どう思うかを知るのはとても楽しいものです。自分が書けばいっぱい友だちも書いてくれるという気持ちになりますし、また次に書こうという意欲にもつながります」（木下先生）

推薦された子どもが感想を読み上げると、全員から大きな拍手が起こった。発表した子どもの誰もが、とても誇らしげな表情を浮かべていたのが印象的だった。木下先生は、隣同士で考えを確認し合い、良いと思ったら推薦し合う活動を、多く取り入れる。

「初めにペア学習をし、友だちに考えを認められることで、自信をもって全体に向けて発表できます」（木下先生）

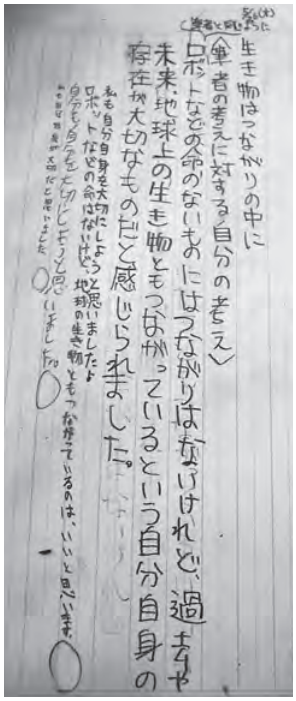

写真7　友だちの感想が書かれた国語のノート。感想に名前も添える

学び合いを通じた子どもの成長

◎4月の時点ではあまり長い文章を書けない子どもが多かったため、いろいろな教科で書くことへの指導を大切にしました。結果は2か月ほどで表れ、自分の考えや理由などを、順を追って説明する子どもが増えてきました（木下先生）

◎学び合いが充実するにつれて、「もっと考える時間をください」など、子どもが考えることを欲する言葉が聞かれるようになりました。授業中の会話も活性化し、友だちの考えを知ることの楽しさを実感しているように思います（木下先生）

◎ノートにコメントを書き合う中で、友だちへの理解が深まり、子どもたちの人間関係が良くなってきました。また、普段は仲の良い子が授業では反対意見を言えるようになってきたこともうれしいことです（木下先生）

◎木下先生の学級では「先生が全て受け止めてくれる」という安心感があります。そのため、どの子も安心して発言したり、さまざまなことに自信をもって取り組めるようになってきていると思います（清水校長）